狭衣物語「よそなから」歌の詠者

――承応三年版本の解釈をめぐって――

須藤　圭

一　はじめに

狭衣物語には、伝本によって小異が見られるが、おおよそ二一〇首の和歌が収められている。これのみを抜き書きした狭衣物語歌集[1]が知られるように、その和歌は、受容の中心を担っていたといっても過言ではない。注目すべきは、狭衣物語歌集のうち、青山会文庫蔵「さころもの哥」や宮内庁書陵部蔵「さころもの哥き、書」、本居宣長記念館蔵宣長自筆「狭衣考物」が和歌に留まらず、詠者名を注記していることである。詠者を検討することは、和歌を適切に解釈する上で最も基礎的な注釈ということができよう。同じ和歌であったとしても、詠者が異なるのみで解釈は大きく違ってくるのである。

本稿では、狭衣物語の諸本のひとつである承応三年（一六五四）に刊行された絵入版本に記された傍注を端緒にしながら、これまでの研究史では、宰相中将妹君（式部卿宮姫君とも称される。本稿では宰相中将妹君と統一する）詠と捉えられている「よそなからちりけん花にたくひなでなと行とまるえだとなりけん」が、果たして、宰相中将妹君の詠歌としてしか捉えることができないのかを検討する。それが宰相中将妹君詠ではなく、狭衣詠としても捉えることができる可能性、あるいは、そうした読みの存在について言及し、あわせて、現在までの研究史に少なからず考察がなされている宰相中将妹君の人物造型について考えていきたい[2]。

充実した多くの論が積み重ねられている宰相中将妹君論という問題をとり上げるのは、源氏宮に準えられた宰相中将妹君がどのような人物として捉えられていたかを究明することによって、狭衣物語受容史の一端を解き明かしたいという立場からである。さらに、承応三年版本の解釈を中心とすることによって、狭衣物語に極めて注目した連歌師たちの理解をめぐる考察にもなりうると思われるのである。

二　問題の所在

谷岡七左衛門板行、田中理兵衛板行、三木氏親信板行のものなどが知られ、広く流布したと思われる承応三年版本を読むとき、絵入であることは当然のことながら、物語本文の傍らに注が付されていることによって、分かりやすく、立ち止まることなく物語を読むことが可能になっているといえる。[3]試みに、承応三年版本の一丁オモテ（図1参照）[4]を見てみると、多く訓読が付されているのみならず、八行目「ひとり見給ふも」に「狭衣」と注して、狭衣がひとりで庭に咲く花木を見ていた、と分かるようになっており、また、九行目「源氏の宮」には「狭衣の母かたのいとこ」と源氏宮の系図が示されている。単に物語本文を読むだけでは分かりにくい箇所に注を付しておくことによって、通読の助けになっているといえ、その解釈も概して信頼できる。

図1　承応三年版本物語本文巻一上（一丁オモテ）

物語本文には奥書などが記されていないため、この傍注を付した人物は定かでなく、本文の校訂者も明らかではない。しかし、中城さと子氏は、承応三年版本の物語本文や狭衣下紐、あるいは系図を検証し、その校訂者を『伊勢物語集注』や『源義弁引抄』などの著作が知られる一華堂切臨と想定している。[5]従って、傍注を付した人物もまた、切臨と考えてよいと思われる。

とりわけて問題としたいことは、この承応三年版本の傍注（以下、版本傍注）に、現在の一般的な解釈とは異なる注が見られることである。承応三年版本の物語本文を挙げる（図2参照）。

狭衣行すりの花のおりかと見るからに過にし春そいと、恋しき

との給ふにいとゞかことがましくながしそへたまふ物から

姫君心この御事にはみゝとゞまり給ひてさま〳〵はづかしくもありける事かなとき、給ふに

狭衣よそなからちりけん花にたくひなでなと行とまるえだとなりけん

なと心中に口おしうおほさる

（参考　集成下二七七頁―二七八頁）[6]

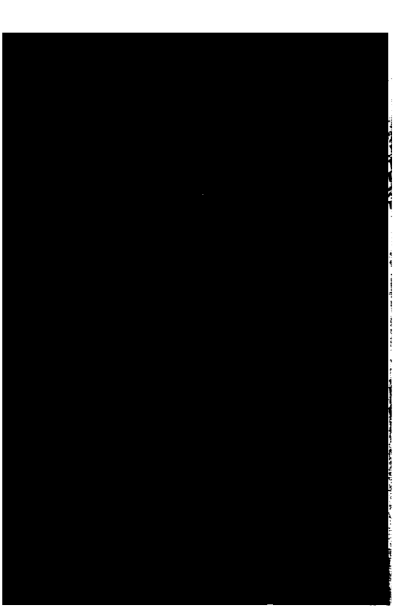

図２　承応三年版本物語本文巻四中（二十九丁ウラ）

巻四、宰相中将母君が亡くなった後、狭衣と宰相中将妹君は遂に契りを交わし、和歌を詠む。ひとまず版本傍注をふまえないでおくと、狭衣が「行すりの」と亡き宰相中将母君に思いを寄せていたことを告白することに対して、それを聞く宰相中将妹君は涙を流しながら、心の中で「よそなから」歌を詠む場面と捉えることができる。承応三年版本を底本とする有朋堂文庫[7]では、「よそなから」歌に対して、「姫」と詠者名を傍記し、日本古典全書[8]や新潮日本古典集成も宰相中将妹君の詠歌と見なすことに違いはない。ところが、版本傍注を見れば、「よそなから」歌に「狭衣」と注しており、狭衣の詠歌と捉えているようなのである。

諸本において、例えば、混態本といわれる九条家旧蔵本などに異同はあるが、解釈の相違を生むような異なりではない。もっとも、承応三年版本の物語本文に記された傍注であるから、その本文に従って読むべきでもあろう。

ここで注目しておきたいのは、諸注釈書と同様に「宰相妹」と詠者名を付す新編日本古典文学全集が[9]「『狭衣下紐』に、「さ衣。よそながらにてなく成給へる御母のごとくにならでとの哥の心也」とある。」と引き、何かしらの注意を促していることである。確かに、ここに引かれる狭衣下紐では、「よそなから」歌を狭衣の詠歌と捉えているように見える。

狭衣下紐以外の古注釈書では、どう解釈されているのであろうか。狭衣下紐の成立後、間もなく著されたと思われる狭衣文談や猪苗代兼寿による狭衣抄、時代は下るが、岡本保孝の狭衣物語校注を見ても、宰相中将妹君の詠歌と注されていることに相違はない[10]。「よそなから」歌を狭衣詠と説く注釈書はほとんど存在せず、多くは宰相中将妹君の詠歌と理解しているのである。

仮に、狭衣詠と捉えた場合、宰相中将母君を「花」に、自身を「枝」に例え、私と共にないままに散ってしまったと聞いています花（宰相中将母君）と連れ立たずにどうして私（狭衣）だけがこの世に留まる枝となってしまったのでしょう、とでも解せようか。しかし、「よそなから」歌が狭衣の詠む「ゆきすりの花のおりかと見るからに過にし春そいとゝ恋しき」と対になっていることや、和歌の直前に宰相中将妹君の行動が描かれていることからも、狭衣詠ではなく宰相中将妹君詠と解することが最も妥当な見

解であることは疑いようがない。

では、何故、このような詠者の解釈の異なりが生じたのか。諸注釈書に同様の記述がほぼ見られないことから、単なる誤りである可能性も考えられる。しかし、ここには、版本の狭衣物語に対する理解が介在しており、見過ごしてはならない要素が含まれているように思われてならないのである。

三　承応三年版本傍注と下紐

承応三年版本には、物語本文の他にも、狭衣下紐、目録並年序、系図が収められている。先に新編日本古典文学全集が引く狭衣下紐を挙げたが、承応三年版本の狭衣下紐（以下、版本下紐）といくつか存する写本の狭衣下紐（以下、写本下紐）を併せて見ることにする。

版本下紐を別にして、写本下紐には、川崎佐知子氏の考察によって、大きく三系統の本文が知られている。[11] このうち、再稿本系の一本とされる紹巴自筆本において、「よそなから」歌に付された注は次のようにある。

一よ所なから　さ衣によ所なからにてなく成給へる御母のこ
　とくにならてとの哥の心也[12]

ここでは、版本傍注のように狭衣詠との解釈を示さず、「さ衣に」と狭衣への返歌であること、すなわち、宰相中将妹君の詠歌と捉えているのである。初稿本系とされる祐範本や増補本系の菊亭文庫本[13]も同じ記述をもち、写本下紐は、総じて、宰相中将妹君の詠歌と見なしている。

一方、版本下紐ではどうか（図3参照）。

一よ所ながら　さ衣　よ所ながらにてなく成給へる御母のご
　とくにならてとの哥の心也

版本下紐では、写本下紐が「に」とする箇所に空白が見え、一見、版本傍注と同じく、狭衣詠と解しているかのようである。た

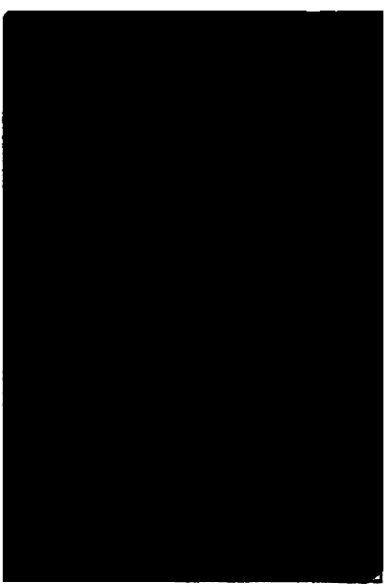

図3　承応三年版本狭衣下紐巻四
（十一丁オモテ）

だし、中城さと子氏が「③（稿者注―「よそなから」歌の項目）で解説される作中歌は宮姫君から狭衣への贈歌であるが、「に」を削ると詠者が狭衣に変化してしまい誤脱となる。[14]」と述べられているように、写本下紐と比べて版本下紐のみが異なることから、誤写や誤脱、さらには、版木の欠けなども想定しておく必要があろう。

しかし、「に」に代わって空白が挿入されていることには、やはり、注目すべきであるように思われる。単なる誤脱の類いであれば、空白がある理由は考えにくく、故意に設置された可能性が十分に想定されなければならない。そうであるならば、この箇所に用いられている空白は何を意味するのであろうか。直ちに句点の意と解して狭衣の詠歌であることを示しているとするには、狭衣詠とする解釈が特異であるために難しく、空白の用法を詳細に検討する必要がある。あるいは、助詞「に」を意味する場合もありうるかもしれない。

版本下紐を見ると、それぞれの空白の間隔には広狭を見出せるが、それと見なしうるものを全てをとり上げれば、相当に多く用いられているといえる。これらは、大きく三つに分類できる。

1　標目と注釈の間の空白

標目と注釈の間に設けられる空白は、一部に限り省略する箇所もあるが、ほぼ全ての項目に見られる。一例を挙げる（以下、問題とする空白に傍線を付す）。

一ひかりうする　賀茂の神詠夢想也御遁世の心なるへし．さるはめづらしきは御即位あるべき事也

物語本文「ひかりうする」という標目に対して、「賀茂の神詠夢想也（後略）」と注しており、この間に空白が見出せる。

2　標目間の空白

標目と標目の間に空白が設置される場合もあり、ごく一部の項目のみに見られる。

一おり見ばや（野さ衣）　朽木の桜　行ふるゝ心也

「おり見ばやくち木のさくらゆきずりにあかぬにほひはさかりなりやと」（参考　集成下二二〇頁）に対する注であるが、「おり見ばや（野さ衣）」と「朽木の桜」の間にある空白が該当する。ここは「おり見ばや（野さ衣）」歌に詠まれる「朽木の桜」とは、「行ふるゝ心也」と注していると捉えるべきであり、「おり見ばや（野さ衣）」と「朽木の桜」はどちらも物語本文を指す標目となる。

3　注釈間の空白

問題とする「よそなから」歌の項目にある空白もこれに該当する。結論から先に述べれば、注釈間に見られる空白には複数の用法を見出せるものの、助詞「に」を意味する例はなく、誤脱の疑

いがある箇所に設置している例はひとつも見出せない。[15] 具体的に例を挙げて見ることにする。

A　注釈と注釈の間の空白

一心うの事や　ものから心をおこす也｜物おそろしからでとは神前にておそる、間皆々へ物おほせらる、事のなきあひだ神慮に物おそろしからずしてすぐし、中比くやしくこそいまは思ひ給へると也

物語本文「心うの事や」という標目に対して「ものから心をおこす也」と注し、空白を設け、それに後続する物語本文「物おそろしからで」に「とは神前にておそる、間（後略）」と注している。空白は、前の物語本文とそれに対する注釈から、次の物語本文と注釈に移行することを示し、両者を区別するものと見なしうる。なお、後者の物語本文が省略される場合もある。

B　注釈中の空白

一浄蔵浄眼の　妙荘厳王は悪王にてまし〳〵けり此二人の御子と御母の浄徳夫人と｜雲雷音宿王花智の御もとにてさとりをひらき（後略）

ここでは、「此二人の御子と御母の浄徳夫人と」が「雲雷音宿王花智の御もとにてさとりをひらき（後略）」と注しており、空白は助詞「が」「は」の意味であって、主語を指すものと分かる。このような例は他にも見られ、同格を示す助詞「の」、あるいは句点の意味をもつ場合もある。

版本下紐に用いられている空白は以上の用法に留まっており、従って、「よそなから」歌の項目、「さ衣　よ所ながらにて（後略）」に見られる空白は、「さ衣」と「よ所ながらにて（後略）」を区分するものと捉えられ、詠者を「さ衣」と明示するための措置と考えられる。版本傍注に留まらず、版本下紐もまた、「よそなから」歌の詠者を狭衣と解しているのである。

ところで、版本傍注をもつ物語本文と版本下紐があわせて刊行されていることから、両者は互いに影響関係にあると考えられる。先に述べたように、版本傍注を付した人物として想定される切臨は、版本下紐の校訂者であるともいう。それでは、これらは、一方が一方を何の惑いもなく受容しているのであるか、もしくは、単に受け入れるのみでなく適宜解釈しながら記しているのか。すなわち、後者であれば、切臨による二度の解釈を経ても訂正されることなく、狭衣詠と捉えられていたことになり、誤写や誤脱である可能性は低いといえるように思われる。

版本傍注と版本下紐との間には、多くの共通項が挙げられる。しかし、版本傍注には、注釈書である版本下紐とは異なって、物語本文の傍記として適切な注釈に改められている箇所を見ることができる。巻四、斎院にて狭衣が源氏宮へ苦悩を訴えるものの応じてもらえず、帰り際、心慰めに女房と贈答する場面をとり上げ

る（物語本文、狭衣下紐の順に挙げ、各々の注に通し番号を付す）。

はかなしやゆめのわたりのうきはしをたのむ心の後もはてぬよ。[1狭衣] [5瑞夢の事也]

うき木にあはん事よりもかたき事どもかなと忍びて聞えたまへどなやましきさまにもてなさせ給ひてよりふさせ給ひぬればはしたなくて出給へるにひんかしのすみのまに花見るとて人々あまたゐたる所によりゐ給ひてきみたちさへあまりにつゝしみ給ひて今はめも見いれ給はねばいみしうつれ〳〵にこそなりにたれとの給へは新少将とておとなしき人ものにもがなやとこそみな思ひたるけしきどもに侍れはましてなにかは見入まいらする人も侍らんときこゆれば。こゝろうの事や。物おそろしからですぐしゝすゑのなかごろくやしうこそ思ひいでらるれなどいつれとなくいひたはふれたまふて

みかきもる野への霞もひまなくてをらてすぎゆくはな桜かな [5狭衣] [6神垣にてひまなくまもらるゝと也]

わざとなくいひすさひ給へば少将

花さくら野へのかすみのひま〳〵におらでは人のすくるものかは。

さまではなでういさめか侍らんと聞ゆれば　○

一はかなしや哥　瑞夢の事也 [3哥さえ衣] [5瑞夢]

一うき木にあはんやうならん　盲亀の浮木のごとくと也 [10]

一とりかへす物にもがなや世中をありしながらの我身と思はん　神前なれは見いれ聞いるゝ人もあらじと也 [17引哥] [12]

一心うの事や　ものから心をおこす也　物おそろしからでとは神前にておそるゝ間皆々へ物おほせらるゝ事のなきあひだ神慮に物おそろしからずしてすぐしゝ中比くやしくこそいまは思ひ給へると也 [14] [13]

一みかきもる　神垣にてひまもなくまもらるゝ也 [16]

一花桜　心かくれなしさまて神の御いさめはあらじと也　恋しくは神のいかきもこえぬべしの心なるべし [19] [18] [17哥]

（参考　集成下二一二頁―二一三頁）

両者を比較すると、①⑧、②⑨、③⑫、④⑭、⑤⑮、⑥⑯、⑦⑱は対応関係にあるといえる。この中で、④⑭に関して見れば、④は⑭よりも簡略であり、長大な注釈を傍記することを避けていると思われる。一方、⑩⑪⑬⑰⑲は版本下紐のみに見られる内容である。その意図を考えると、仮に、版本傍注が⑩を有する場合、読者が「盲亀の浮木」の故事を知りえなければそもそも意味のない注釈になってしまうであろうし、「うき木にあはん」のみで理解しうると捉えたとも考えられる。また、⑪の引歌を指摘すれば、読者の視点は引歌の解釈に及び、本文から離れていってしまうことになろう。すなわち、版本傍注は版本下紐の解釈と大きく異なるものは見当たらないにせよ、そのままに記載しているわ

行すりの花のおりかと見るからに過にし春そいとゝ恋しき（狭衣）

との給ふにいとゞかことがましくながしそへたまふ物からこの御事にはみゝとゞまり給ひてさま〳〵はづかしくもありける事かなときゝ給ふに（姫君心）

よそなからちりけん花にたくひなでなと行とまるえだとなりけん（狭衣）

なと心中に口おしうおほさる（なくなり給ふ母上の事）

（参考　集成下二七七頁―二七八頁）

狭衣が宰相中将母君を回想しながら、宰相中将妹君に向けて詠む一首目の和歌に注目したい。「行すりの」歌は、以前、宰相中将母君に贈った「おり見ばやくち木のさくらゆきずりにあかぬにほひはさかりなりやと」（参考　集成下二二〇頁）をふまえて詠まれており、宰相中将母君への愛情が込められている。しかし、宰相中将妹君を前にしての詠歌であることをふまえれば、必ずしも、宰相中将母君に対する思慕のみが込められていると捉えるべきではない。亡き宰相中将母君を「過にし春」と詠むことから、今生きている宰相中将妹君への思い、いうならば過ぎていない春への恋に主眼を置いているとも読みうる。その一方で、狭衣が宰相中将母君に強く思いを寄せていたことは明らかでもあり、その心情を表現したものこそ、二首目の「よそなから」歌と解釈できないか。だからこそ、心中詠にもなりうるのである。加えて、こけではなく、受容しつつも、物語本文の傍書として相応しい記述となるように注を付しているのである。

「よそなから」歌を狭衣詠とする版本下紐の記述は、写本下紐との比較から、偶発的な誤りによって生じたものと考えられてきた。また、版本傍注も、その解釈がとりわけて注目されることはなかった。それが妥当であるとも思う。しかし、これまで考察してきたことからは、意図的に「よそなから」歌を狭衣詠とする可能性も考えてみる必要があるように思われてならない。もちろん、「よそなから」歌を狭衣の詠歌と読解することは誤りであろうが、そうすることを許容する何らかの背景を見出してもよいのではないか。最後に、「よそなから」歌を狭衣の詠歌とする要因について考えてみることにしたい。

四　宰相中将妹君の人物造型

宰相中将妹君の姿を狭衣が初めて見た折、「よそなから」歌は詠まれる。一部は再掲になるが、ここに挙げておく。

思はすにおかしかりしほかげはそれにやと思ひよそふるまてありがたく若く物し給ひしかなほど〳〵思ひうつりぬべかりしをおもひそめつる事かはらぬくせなればかしこくぞ思ひ忍ひてやみにしかあの木すゑともはそのよの心地してあはれなるを猶見給へとせちにおこし聞え給ふて（姫君にもとより也）（姫君の母上へ也）

の辺りはほぼ狭衣の行動のみが語られていることも、狭衣詠となる要因として挙げられよう。

狭衣詠と捉え、「ちりけん花」を宰相中将母君に、「行とまるえだ」を狭衣自身に準えたと解す。愛する宰相中将母君と共に私も亡くなってしまってよかったものを、と心中で詠む狭衣の姿を想定する余地は、不審はあるが、やはり残されている。

では、「よそなから」歌を狭衣の詠歌と解する要因はあったにせよ、宰相中将妹君の詠歌としない必然性はありうるのであろうか。宰相中将妹君は、巻三、兄の宰相中将によって、「玉しゐのかよふあたりにあらず共むすびやせましたがへのつま」（参考　集成下一五〇頁）と詠まれ、読者に初めて示されると同時に、狭衣に関心を寄せられる。巻四に至って、ようやく、狭衣は宰相中将妹君の姿を見る。

女君いと、わびしくて引かづき給へるをとかくひきあらはしつ、見奉り給ふに斎院にそいみじく似奉りたまへりける．たまのをのひめ君のやうのなるかはねの中にても彼御ありさまにすこしもおほえたる・玉の光たにかよは、そでにつ、みても見まほしくおぼしねがひつるにかうをと聞も物むつかしかるましき渡りにすこしのなぐさめ所のありけるもたゞあなかちなるこ、ろのうちをあはれと見給ひてか、るかたしろをかみのつくりいでたまへるにやとおぼしよるにもあぢきなくなみだそこぼる、

狭衣（なげき）わびねぬよの空に、実（なさけ）心也たるかな心づくしのありあけの月

と聞え給へどいらへ聞え給はぬぞいとくちおしかりける

（参考　集成下二五四頁―二五五頁）

源氏宮を求め続ける狭衣によって、その姿を初めて見られた宰相中将妹君は「かゝるかたしろ」と称され、源氏宮の「形代」としての要素を付与される。この物語本文にある「かたしろ」に注して、版本下紐では、「一形代　人形　源氏の宇治の巻に在之」とあり、「形代」と「人形」を同意に扱っていることに留意しておきたい。

狭衣物語には、もう一例、「形代」の語を見ることができる。源氏宮に似る宰相中将妹君と出逢ったことを語りながら、狭衣が源氏宮に恋慕を訴える場面であるが、宰相中将妹君は「中〳〵なるかたしろをこそ見給へしか」（参考　集成下三〇五頁）と形容されて語られている。先の場面以降、宰相中将妹君は源氏宮の存在を常に投影し続けているといえる。しかし、宰相中将妹君が「形代」であり続けることはない。

「形代」に類似の語として、「人形」「撫物」が指摘されており、狭衣物語に「撫物」の語は用いられていないが、承応三年版本に「人形」の語を一例に限って見ることができる。[16]「よそなから」歌が詠まれた後、宰相中将妹君の出産や立后が描かれた後の場面である。

思ふことなるともなしにいくかへりうらみわたりぬかも（今上）
の川波
なめげなるこゝろの程はきしかた行末こよなく覚ゆるを露は（斎院へ好色は神に無礼也）
かりおぼしとがめずかうあるましきさまにさへしなし給へる（明位の事）
かみの御こゝろはおもへばかたじけなくありがたく思ひしら
れ給ふをひとかたしも見かたうのみ成たまひにけるのみぞ猶（人形也）
さらにうらめしくおぼえさせ給ふ

（参考　集成下三四〇頁―三四一頁）

賀茂行幸の折、源氏宮を思う狭衣の心内語に「ひとかた（人形也）」とある。「ひとかた」は「一方」とも解釈できるが、版本下紐を見れば、「人形にしも見がたきと也（叱云）斎院の人形になるべし非二一方一」として、昌叱説を引き、「人形」を採用していることには注目しておかなければならない。[17]

「形代」と「人形」は区別して考えるべきであろうが、前掲した版本下紐には、「一形代　人形　源氏の宇治の巻に在之」とあった。版本傍注を付した人物と思われる切臨の著作である『源義弁引抄』[18]にも、「むかしおほゆる人かた」（源氏物語宿木巻）に対する注として『白氏文集』に用いられる李夫人の故事などを引き、「人かた」を形のみが似るもの、つまり、「形代」、あるいは身代わりの意として捉えている。従って、「形代」と「人形」を同義とすれば、「一方」ではなく「人形」とする版本傍注の解釈には、源氏宮ではなく、宰相中将妹君を読み込もうとする意図を考えなければならない。狭衣は源氏宮に留まらず、「形代」と形容された宰相中将妹君にさえも逢い難くなってしまったことを嘆くのであって、宰相中将妹君は狭衣の求める源氏宮の「形代（人形）」では存在しえないことを示しているのである。

その直後の場面に、宰相中将妹君の詠歌が描かれる。

（式部卿宮の女也）
中宮はほのきかせ給ひて猶もてはなれ給ひつる御中にはあら
ざりけりとこゝろ得させたまひて
（中宮へ入道宮へ今上の心さはゝと也）
立かへりしたはさはげといにしへの野中の水はみくさゐ
にけり

いかにちぎりしなど手ならひにかきすさひさせ給へるに、ちかくよらせ給へば、すみをくろう引つけておましのしたにさし入させ給ふを、

（参考　集成下三五〇―三五一頁）

手習いに書かれた和歌は、狭衣が近寄ると墨を引かれてしまう。しかし、狭衣を前にしての手習いであるから、見られることを想定していたとも考えられる。その「立かへり」歌は狭衣への嫉妬を表出させる。小田切文洋氏がこの場面について、「妹君の側に視点を寄せて、その心を内側から描いているのは、この箇所だけである。ここは前述のとおり、狭衣との引き合いで妹君は登場しているのだが、それにしても妹君へ視点を移動させた描写には、妹君の扱い方にある変化を感じさせる。[19]」と述べられている。その容姿や心情の多くは、兄や母によって語られるのみであ

ったにもかかわらず、狭衣が「形代（人形）」ではなくなってしまったと嘆いた直後、宰相中将妹君は女二宮との関係を疑い、自らの思いをあらわにするのである。

このような版本傍注の態度を見ていくと、宰相中将妹君が「形代（人形）」でなくなるまで、一貫して、「形代（人形）」として捉えていたのではないかと思われる。そうであるとすれば、宰相中将妹君を、同じく「形代（人形）」と称される源氏物語の浮舟のように、物いわない存在に閉じ込めておこうとする意識が働いているとは考えられないか。[20]「形代（人形）」であるはずの宰相中将妹君が、「よそなから」歌のような「たくひなで」「なと行とまる」といった強い調子で、なおかつ、内面の意志を表出する和歌を読むことは相応しくないように思われるのである。[21]

さらに、次に挙げる二首の和歌にも注目しておきたい。どちらも、未だ狭衣に出逢う前の場面であるが、通例では宰相中将妹君の詠歌と理解されることに対し、版本傍注では異なる解釈が示されている。

式部卿の宮の姫君に聞えよと大宮の（御母堂后宮也）、給ひしかはせんじがをしへつるま、にかきてやりつるとてたまはせたりいかにはか〳〵しき事申しつらんとて見たまへは

のどかにもたのまざらなん庭たつみかげ見ゆべくも（春宮の書給也）
あらぬながめを（五月雨と也）

とかや所〳〵ほのかなるすみつきたしかならねと母君のにい（中宮也大将の妹）
とよくおほえて思ひなしにや今すこしわかやかにらうたけなるすぢさへそひぬ

（参考　集成下二三二頁）

春宮のもとに贈られる様々な消息の中から、狭衣が宰相中将妹君のものを見る場面であるが、諸注釈書が宰相中将妹君詠と解する「のどかにも」歌を、版本傍注は春宮の詠とする。後続する物語本文からは、春宮の筆蹟に対する評価としては不審な点も多い。ただし、春宮が「せんじがをしへつるま、にかきてやりつる」と語り、「いかにはか〳〵しき事申しつらん」と狭衣が応じながら、「見たまへは」とあって和歌が記される本文からは、春宮の書いた和歌とすることも理解できなくはない。

うきものといまそしりぬるかぎりあれば　思ひなからも（姫君母上）（そむかんと）
そむきぬる世を（思々て過るを今まむく世中と也）

なとやうにかたのやうにて出し給へれと

（参考　集成下二四三頁）

宰相中将妹君を狭衣に託そうと決めた宰相中将母君は、その返歌を書くことを宰相中将妹君に勧め、「うきものと」と詠まれる。諸注釈書に宰相中将妹君詠とされる和歌であるが、版本傍注は「姫君母上」として、宰相中将母君と解している。「かたのやうに出し給へれと」とあることから、宰相中将母君による代詠と解したとも考えられるが、宰相中将妹君が宰相中将母君に求めら

れるがままに詠んだと捉えたい。従って、特に前者に関しては読解の誤りの可能性も考えられるが、いずれにせよ、版本傍注では、どちらも宰相中将妹君詠との理解を示してはいないのである。

五　おわりに

宰相中将妹君の導入は、冒頭歌「いかにせんいはぬ色なる花ならばこゝろのうちをしる人そなき」（参考　集成上一〇頁）と始まる源氏宮思慕の物語を終えるためのひとつの要素として認められるように思う。そして、版本傍注や版本下紐はそれに重きを置いたひとつの読みを提示しているようにも捉えられる。

すでに述べたように、宰相中将妹君は物語に登場して以降、常に亡き母を思い嘆き、狭衣に対して訴えかけるような詠歌はなく、源氏宮の「形代（人形）」として描写されている。やがて、狭衣に「ひとかたし（人形也）も見かたうのみ成たまひにける」といわれ、また、自らの思いを読み表して、「形代（人形）」ではなくなるのであるが、その直前の一場面を見たい。

か、る程はすこし御心もなぐさむやうなるに又いかにぞやたゞそれかとまで（源氏宮也今の事歟也）おほえ奉り給へる御かたちけはひもふと思ひ出られさせ給ふかたつかたは先御むねふたがりてこの世の内ながら見たてまつらずなるべしとは思ひかけさりしわざかなとおぼしつゞくる程はかばかり見れともあかぬ御ありさまをさしおきてつく〴〵（今上）とながめいらせ給ひてもかくこひん物としりてやかねてよりあふことたゆとみてなげきけん

とおぼさるゝにつけてもくらべくるしき心中は猶いとわりなし．

（参考　集成下三二七―三二八頁）

狭衣は「たゞそれかとまでおほえ奉り給へる御かたちけはひも」と、宰相中将妹君と源氏宮との類似を指摘しているが、「くらべくるしき心中は猶いとわりなし．」と続け、どちらとも選ぶことができない。狭衣にとって、「形代（人形）」であるはずの宰相中将妹君がそれ以上の存在となり、源氏宮と比べることはできないとまで思わせているのである。宰相中将妹君は「形代（人形）」に留まり、物いわない存在であり続けることはなく、また、狭衣にとっても、宰相中将妹君が「形代（人形）」であり続けることはないといえる。この直後、宰相中将妹君は出産、立后する。源氏宮思慕の物語として見れば、本来、源氏宮が担うべき位置を、宰相中将妹君が占めることになる。殊更に「形代（人形）」であることを明記して源氏宮思慕を想起させつつも、それが「形代（人形）」でなくなり、源氏宮にとって代わることによって、より強く、源氏宮思慕の物語の結末を導くことができるのである。

「よそなから」歌を宰相中将妹君の詠歌としない要因もまた、

源氏宮との物語を終えるため、宰相中将妹君の「形代（人形）」としての性質を強く示そうとしていることを背景に求めることができよう。版本傍注や版本下紐の作者にとって、宰相中将妹君が源氏宮の「形代（人形）」でなくなるまで、自立的で極めて意志の強い和歌を詠めるはずなどなかったのである。

もっとも、結局、宰相中将妹君が単なる源氏宮の「形代（人形）」でありえなかったことは多く指摘されており、すでに明らかなことである。源氏物語を継承、批評する狭衣物語の特徴でもあろう。しかし、ここで述べておきたいことは、版本傍注や版本下紐には、宰相中将妹君を「形代（人形）」という枠に閉じ込めようとする読みが反映していると見なしうることである。ここには版本傍注と版本下紐が成立した時代の、ひとつの読みの様相が垣間見られるのではないだろうか。

多くの注釈書では宰相中将妹君の詠とされる「よそなから」歌が、版本傍注や版本下紐においてのみ、狭衣の詠歌とされていることを端緒に、宰相中将妹君の人物造型について考察してきた。注釈の基礎となる詠者の相違は、単なる誤りとすべき問題ではない。そこには、和歌の解釈に留まらない、物語全体に及ぶ人物への視点をも見ることができるのである。

注

（1）拙稿「十本対照「さころもの哥」本文と校異―青山会文庫蔵「さころもの哥」の紹介―」（『平安文学研究・衣笠編』（和泉書院、二〇〇九年））

（2）平野孝子氏「狭衣物語の構成」（「国文学　言語と文芸」五十五、一九六七年十一月・『日本文学研究資料叢書　平安朝物語Ⅳ』（有精堂出版、一九八〇年）、久下晴康（裕利）氏「狭衣物語の構造―回帰する日常性―」（「中古文学論攷」二、一九八一年十一月・『平安後期物語の研究　狭衣・浜松』「『狭衣物語』の構造―回帰する日常性―」（新典社、一九八四年））、鈴木泰恵氏「狭衣物語後半の方法―宰相中将妹君導入をめぐって―」（「国文学研究」九十三、一九八七年十月・『狭衣物語／批評』「恋の物語の終焉―式部卿宮の姫君をめぐって」（翰林書房、二〇〇七年））、同氏「狭衣物語の基幹―〈紫のゆかり〉の物語の行方―」（「武蔵野女子大学紀要」二十九、一九九四年三月・『狭衣物語／批評』「〈知〉のたわむれ―「紫」が「紫のゆかり」であるならば……」（翰林書房、二〇〇七年））、倉田実氏『狭衣の恋』「〈形代の恋〉の狭衣―宮の姫君の物語」（翰林書房、一九九九年）など。

（3）清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』（和泉書院、二〇〇三年）では、絵入源氏物語に対して、挿絵のみならず、読点、振仮名、濁点、簡単な傍注などを付した画期的な書物であったと評し、近世の人々に歓迎されたと述べる。

（4）承応三年版本の影印は、京都府立総合資料館蔵本（寛政十一年（一七九九）三木安兵衛板行（函架番号・和八三

八―四二）に依る。

承応三年（一六五四）谷岡七左衛門板行のものが『平安朝物語板本叢書　狭衣物語（上―下）』（有精堂、一九八六年）に収められているが、読点などの差異を除けば、両者に大きな相違はない。本稿で取り上げようとする箇所も、版によって異なりが生じるものではないことを付記しておく。

（5）『流布本狭衣物語と下紐の研究』「版本『下紐』の成立」（新典社、二〇〇三年）

（6）承応三年版本の引用は注（4）に依り、可能な限り原本の体裁に従って翻刻する。ただし、振仮名や訓読は省略し、傍線は稿者による。なお、参考として、物語本文の引用に限って文末の（　）内に鈴木一雄氏校注『新潮日本古典集成　狭衣物語（上―下）』（新潮社、一九八五年―一九八六年）の頁数を示す。以下同じ。

（7）武笠三氏校注『有朋堂文庫　狭衣物語』（有朋堂書店、一九一七年）

（8）松村博司氏・石川徹氏校注『日本古典全書　狭衣物語（上―下）』（朝日新聞社、一九六五年―一九六七年）

（9）小町谷照彦氏・後藤祥子氏校注『新編日本古典文学全集（29―30）　狭衣物語（①―②）』（小学館、一九九九年―二〇〇一年）

（10）狭衣文談は一文字昭子氏・後藤祥子氏・横井孝氏「常磐松文庫蔵『狭衣文談』翻刻（一―四）・正誤表ならびに校異表（一―二）」（「実践女子大学文芸資料研究所　別冊年報」五―十、二〇〇一年三月―二〇〇六年三月）、狭衣抄は川崎佐知子氏『「狭衣物語」享受史論究』「翻刻・宮城県図書館伊達文庫蔵『狭衣物語抄』」（思文閣出版、二〇一〇年）、狭衣物語校注は『ノートルダム清心女子大学古典叢書（13―15）　狭衣物語校注（天―人）』（福武書店、一九八四年）に依る。以下同じ。

（11）『「狭衣物語」享受史論究』「『狭衣下紐』の伝本」（注（10）・「『狭衣下紐』諸本考」（「中古文学」五十五、一九九五年五月））

（12）『大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇1』（汲古書院、二〇〇七年）に依る。以下同じ。

（13）祐範本は『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ　物語史研究の方法と展望』（実践女子大学文芸資料研究所、一九九九年）、菊亭文庫本は中城さと子氏『流布本狭衣物語と下紐の研究』「京都大学蔵菊亭文庫『下紐』翻刻」（注（5））に依る。

（14）注（5）に同じ。

（15）「今さらにえぞ恋ざらんくみも見ぬ野中の水のゆくゑし らねば」（参考　集成下三五一頁）に対して付された注を挙げれば、写本下紐の多くが「えそしらさらんとも在之恋如何無分別」（紹巴自筆本）とするのに対し、版本下紐は

「えぞしらさらんとも在レ之如何無二分別一　今上」として、「恋」の字を欠くのである。恋などしていないのにそれを疑うことは分別のないことだ、と詠む狭衣の詠歌の注としては「恋如何」が適切である。版本下紐には、「恋」の字に代わって空白は設置されていない。

(16) 索引を引くと、日本古典全書による『古活字本　狭衣物語総索引　日本古典全書本』（笠間書院、一九七七年）には一例、日本古典文学大系による『狭衣物語語彙索引　内閣文庫蔵本』（笠間書院、一九七五年）には見出せない。

(17) 版本傍注や版本下紐が「人形」をとることについては、日本古典全書や新潮日本古典集成にも指摘がある。前者では、「「人形」「一方」を掛詞として両義に採れば別だが、どちらか一つを採るとすれば、「人形」説を優れりとすべきであらう。」とする。なお、狭衣文談は「（前略）一かたにしもとハ斎院又ハ入道ノ宮なとの事にや下紐にも一かたにしもみがたきと也とあり」、狭衣抄は「一方也、斎院の事也、人形と云説有」とする。

(18) 『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成2』（雄松堂フィルム出版、一九八〇年）に依る。

(19) 小田切文洋氏「『狭衣物語』覚書」（「日本大学文理学部（三島）研究年報」三十四、一九八六年二月）

(20) 源氏物語の形代に関する論考は多い。例えば、鈴木日出男氏『源氏物語虚構論』「中将の君と浮舟」（東京大学出版会、二〇〇三年・「浮舟と中将の君―源氏物語作中人物論評―」（「東京学芸大学紀要　第二部門人文科学」二十七、一九七六年二月）など。

(21) 真銅本住吉物語に、姫君が母代わりの乳母の死を嘆いて、「は、ちらはおなしたくひにちりもせてなとゆきとまるえたとなるらん」（小林健二氏・徳田和夫氏・菊地仁氏『真銅本「住吉物語」の研究』（笠間書院、一九九六年）に依る）と詠む場面がある。狭衣物語の影響を受けたものと思われるが、姫君は「形代」として描かれてはいない。

付記

末筆ながら、貴重な典籍の閲覧・影印・翻刻をご許可いただきました京都府立総合資料館に心よりお礼申し上げます。なお、本稿は、狭衣物語研究会（二〇〇九年十一月二十九日、於・奈良県女性センター）における口頭発表をもとにしています。席上、ご教示いただきました先生方に深謝申し上げます。

（すどう・けい　本学博士後期課程）